



「釜玉」「ぶっかけ」「きじょうゆ」。これらを知っている人は、相当のさめきうどん通です。綾川町は、さめきうどん発祥の地で、有名なうどん店があり、道の駅にはうどん会館まであります。

国保病院・診療所は、医療機関が少ない地域に保険からお金を出して作られてきました。陶病院も、一九五一年、そのような歴史から出発しています。二〇〇四年には、新築・移転し、町内が一望できる素晴らしい環境の中で医療を行っています。医師は八人で、自治医大卒業生が五人います。

在宅医療に力

私は、院長先生のご病気のため、昨年四月に赴任したので

患者や家族の思い大切に

が、前任地から在宅医療に取り組みできませんでした。携帯電話は、寝る時もトイレに行く時も手放さず、電話を受けてきました。赴任してすぐに、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の女性の主人、徐々に全身に進みます。飲

み込みが難しく食事がとれなくなり、最後は息ができなくなるという難病です。

しかし、人工呼吸器を付ければ延命は可能ですし、目の動きや少し動く筋肉を使って自分の意思を伝えることも可能になっています。

狭間で揺れる

家にケアマネジャー、訪問看護師、ヘルパー、保健師、それに私が加わって、今後の支援について話し合いました。

「家であるべく診てほしいけど、呼吸器だけはつけられない」と。それだけは守ってほしい」と懇願されます。専門病棟も見てきた、といいます。

「呼吸器を付けてもがんばっている人がたくさんいますよ」と何度も説明しましたが、答えは同じです。ご主人は、本人の意思を尊重したい気持ちと、呼吸器を付けて長生きしてほしいという気持ちで複雑でした。

数カ月後、呼吸が本当に弱くなり、息が苦しくなりました。「呼吸器を付けましょう」「先生、ありがと。でも、かまいませんん」、かすかな声が返ってきました。

しばらくして、支えていた人たちが集まりました。呼吸器の話をするつもりでしたが、本人は家族に指示して元気な時の趣味だった「ちぎり絵」を見せてくれました。趣味の域を超えた素晴らしいもので、皆、感激、昔話に花が咲きました。

亡くなられたのは、それから二日後でした。それが良かったのかどうか医師として本当に悩みます。ご主人は、一人暮らしになりさびしくなりました。

「この病院が良かったので、息子が近くに家を建ててくれて、一緒に住むことになりそうです」と先日、私の外来で話され、笑顔が少しもどりました。本人や家族の思いを大切に、いろいろな選択肢を支えることができる医療を提供していきたい。そう考えています。

(次回予定は北海道)

大原 昌樹 8期生1985年卒



訪問診療を始めたころのALSの女性と介護をされているご主人

綾川町国民健康保険陶(すえ)病院

【私の勤務地】63床の小さな病院だが、地域包括支援センター、老人介護支援センター、訪問看護ステーション、子どもが病気の時にお預かりする病児保育室などを併設する。「地域包括ケア」が理念で、病気を治すだけでなく、予防や健康づくり、在宅ケアなどに力を入れている。